

添牙いるは

Soekiba Iroha

イラスト：ターヤ

新人忍者の



実技演習

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

「い……これ……帰ったら読んでくれるっ!？」

大学生活二年目の春、最初の授業はアーキテクチャだった。コーディングにおけるロジックについては大好物だが、それを動かすハードウェアについては……どうにも食指が動かない。

講義が終わったところで、僕はぐったりと机に突っ伏していた。少しして、教室から人が捌けてくると、このような無様な姿は目立ってしまふ。気を取り直して席を立ち、次の授業へと向かおうとするも——廊下で僕を待ち構えている者がいた。

フリルを好み、今日もパステルグリーンの襟元をフリフリさせているのは織寺春萌おりでらはるも——大学院生の先輩である。

肩口には重なり合ったクドいほどのフリル。

そこから伸ばされた両腕が、僕をグイグイと教室へと押し戻していく。

何を考えているのやら……と戸惑うも、彼女の手には茶封筒が握られていた。それも、A4サイズのしっかりしたものである。

その無骨な体裁には、ほろ苦くも甘酸っぱい青春のページかのような若い瑞々しさはまったく感じられない。何より、僕も彼女も別途恋人持ちだ。皆が期待するような面白おかしい展開とは無縁である。

ともあれ、通路の真ん中で押し合っている場合でもない。ここは往来の邪魔になる。僕が書類を受け取ると、彼女は何も言わずにくるりと踵を返した。ふわりと浮き上がる後ろ髪は、彼女曰く『ネオ・ソバージュ』と呼ばれる新種らしい。その第一印象は『風俗嬢』なのだけど、それは僕の胸の内に静かに仕舞いこんである。

そして、早足に廊下にたむろする生徒たちの間をすり抜けていく春萌先輩見守りつつ、僕は封筒を鞆にしまった。家で読め、という指示だったし。

とはいえ、その中身は何となく察しはつく。何故なら、彼女は絵描きであり、同人作家だ。ならば、このサイズ、この厚み……間違いないだろう。その内容までは判らないが……楽しみにしておいて損はなさそうだ。

新人忍者の実技演習

添牙いろは

さて、理系の大学というのは文系と比べて必要な単位数が圧倒的に多いらしい。しかし、それも最初頑張れば徐々に軽くなっていく。実際、ぎつしりとフルで埋まっていた一年目に対して、二年目の時間割にはとどころに空きができてくれた。

が、それでもやはり授業は多い。僕は夕方までみっちり学業に励み、そこから開放されたのは六時過ぎ。

だが……僕にはここから課外活動が残されている。

下校中の人の流れに紛れて研究棟Bから出てみると、白ニットのワンピース女と目が合った。

鷹池たかいけはだし裸足である。

そっちの授業はとっくに終わっているだろうに、今日も今日とてご苦労なことだ。

薄暗い中でも、彼女のメリハリの利いたシルエットはよく目立つ。そこに乗るのはサックリ整えられた丸い頭の眼鏡ヅラ。度は入っていないが、レンズ越しに睨みつける眼光は伊達ではない。何しろ、こんな似たような格好ばかりの理系男子の中からこゝも容易く僕を見つけ出すのだから。

つい恐縮して視線をそらしてしまうが、そんな僅かな隙すら彼女は見逃さない。

「こら！ 東科大学二年の輝山きやまこうすけ工祐！ ナニ逃げようとしてんの！」

いきなりフルネームで叫ぶか、普通!?

慌てて人混みを掻き分け、

ほうほうの体でやっとの到着。

そんな僕への労いの言葉がコレである。

「今日も遅くまでお疲れね、大学生様」

彼女が僕を大学生と呼ぶのは、彼女が専門学校生だからだ。この東科大学という情報系の単科大学の敷地内には、同じく情報系の専門学校が併設されている。鷹池はそちらの生徒というわけだ。

とはいえ、本番に弱い性格が災いして受験に失敗しただけで、従来のスペックはすべてにおいて僕より高い。ふたりの格付けは済んでいるがゆえに、嫌味の一つも言いたくなるのだろう。

「待ちくたびれたなら先に帰っても良かったんだぞ。明日もあるのだし」

そんな僕からの労りに対して、彼女は眼鏡のツルをクイクイと持ち上げながら説教を始める。

「輝山がそんなんだから、いつまで経ってもできないんじゃない。忘れてないわよね、できるまで続ける、って約束」

「お……覚えてるよ」

物凄い剣幕に、僕は大人しく引き下がる。相変わらず怒りっぽい……というより、

不快感の表現が相変わらずキツイ。彼女とは中学生からの付き合いだが、最初はこうではなかった。高校に入って、僕がだらしなくなってきた頃から……こんなになっちゃったんだよなあ……。だから、彼女の変貌は僕に一因があるのかもしれない。

「今日は……研究棟Dにしましょうか。専門側は授業終わって随分経つから」

そこに他意はないだろう。比較的僕たちがよく使う場所だし、妥当なところだ。

が、用があるのは建物内の部屋ではない。僕たちは辺りを見回しながら、その裏手へと回っていく。

木々が生い茂り、窓明かりもなくすっかり暗い。遠くに下校中の学生たちの声はあるが、近くに聞こえるのは木の葉が擦り合う音だけ。

「ところで輝山、準備の方はできてるの？ 時間も遅いし、手間取らせないで欲しいのだけど」

焦る彼女には実物を見せるのが早い。すぐにでも始められるところを見せた途端――

「おちんぼっ♡♡♡」

それまでピリピリしていた鷹池の表情が一気に解けた。そして、無造作にワンピー――

スの裾に手を掛けると、そのまま躊躇なくグイグイと持ち上げてしまう。中から現れたのはショーツ……ではなく、真つ黒い逆三角形に整えられた毛玉。そして、ぼよんぼよんと揺れる二つの乳房の先端ではピンク色に膨れ上がった突起が揺れている。

肩と袖から服を抜いた彼女の顔は、どこまでも無邪気だ。一瞬前の仏頂面を忘れさせてしまうほどに。

「おちんぼっ、おちんぼ！ こーちゃんのおちんぼお……♡」

眼鏡は服と一緒に巻き込んでしまったのだろう。裸眼の彼女の言葉遣いは、僕に対する呼び名まで中学生の頃に返っている。それはまさに出逢った当時——僕が恋した鷹池裸足に戻ってくれたようだ。

その彼女が、僕の足元に跪き、一心不乱に僕の愚息に舌を這わせている。それも、上目遣いで僕の表情を窺いながら。こんなに健気で可愛らしい眼差しを向けて。

「ほらほら、こーちゃん。私がおちんぼ舐めてる間に準備準備♪」

下は彼女によって剥き出しにされている。彼女が求めているのは、上の方だ。

あまり待たせていると、僕の方に限界が来てしまう。羽織っていただけのカーディガンはそのまま下に落とし、中に着ていた長袖は、中のTシャツと一緒に頭から抜いた。

「うんっ、こーちゃんも準備オツケーだね！」

サツと立ち上がると、彼女は放り出して自分の鞆から四角いシートを取り出す。それをパパッと広げて敷き、その上に仰向けにゴロリと寝転んだ。

「それじゃ、作りましよ。私たちの……赤ちゃん♥」

大股を開き、さらにその中央の二枚肉をも指で広げて彼女は待っている。照明は殆どないはずなのに、濡れた女のコがチロチロと明かりを照り返しているようだ。

すべてを曝け出して男を待つ彼女に、僕も彼女を欲しくなってきた。誘われるがままに膝の間から彼女の女体カラダに覆いかぶさるが……

「はいっ、こーちゃん。子作り前の挨拶は？」

鼻の頭をツンと突かれただけで、僕の頭は押し返された。何度も繰り返してきているのだが、最初の一回はいつも照れてしまう。

「……愛してるよ、裸足」

普段は下の名前で呼ばれることを嫌う彼女だが、このときばかりは呼んで欲しいと逆にせがむ。

「うんっ！ 裸の私！ こーちゃんのための裸の私っ！ こーちゃん大好き！ 愛してるっ！ 早く私の膣内なに来てえっ！」

求められるがままに、僕は彼女の膣内なへと埋没していく。

それを受け止めて、裸足の腕がより、さらに、強く締めつけてきた。

彼女の抱擁は、僕が膣奥を求めるところで——

ようやく、彼女の頬に満足そうな笑みが浮かんだ。

「やっ和外側がくっついたね、こーちゃん」

彼女にとつては、これもまだ外だという。

「早く私の胎内に来て。おちんぼみるく受精みたい、って私の赤ちゃんがざわついてるの」

これだけでは満足できず、彼女の腰がムズムズと動き始めた。僕の方も……待ちきれない！

「あうふんっ！」

ズン、と腰を撞くと、彼女の喉が嬉しそうにいななく。

「嬉しいっ、気持ちいいっ！ もっと！ もっとお♥」

深く根本まで埋め込む度に、裸足の膣内がギュッギュと締め付けてきた。しかし、悦びの表現は身体だけに収まらない。

「おちんぼ大好きっ！ 気持ちいいよおっ！ こーちゃんっ！ おちんぼ！ おちんぼー!!」

「裸足のおまんこも……気持ちいいよ！ 温かくて……ヌルヌルで……!!」

言葉が身体を加速させ、身体が言葉を紡ぎ出す。僕たちの中で熱と快楽が交互に高め合い、早くも最初の絶頂を迎えようとしていた。

「こーちゃん！ 絶頂ちゃう！ こーちゃんのおちんぼで……絶頂ちゃうううう♥」
「僕もっ、射精すよ！ 裸足のおまんこに、全部、最後まで……！」

「ふああああああんっ♥」

ビュクルツ！ ビュクルツ！ ビュルル……！！

腰の間をできる限り押し込み、僕は裸足の奥深くに自分の遺伝子を送り込んでゆく。

「はふ、はふ……おちんぼみるくだあ……こーちゃんの……赤ちゃん♥」

裸足にとつての至福の時は、この恍惚の一瞬だけ。

何故ならば……

「それじゃ、こーちゃん！ このまま二杯目……射精るよね？」

一度は絶頂を迎えたというのに、すぐさま次を求めてくる。

拒もうにも……僕の身体は、未だ硬さが失われていない。

それは、僕を膣内で捉えている彼女自身が一番よく分かっているのだろう。肉壁をヒクヒクと窄めて、僕に続きを促している。

「腰が疲れたなら私が上になってあげるから♪ 今夜も子作りがんばろー！」
ぐーっと持ち上げられた握り拳が、僕の背に落ちてきたようだ。きつと今夜も射精
続ける限り……いや、射精でなくなっても、勃た起たなくなっても、彼女の膺で、舌で、
時間の限り愛され続けるのだろう。

学校の門が閉ざされる、その時まで。

研究室で寝泊まりしている院生もいるため、大学自体は四六時中動いている。が、
門は八時で閉じてしまう。正確には、学生証の提示など、ややこしい手続きが必要に
なる。構内でやらかしている行為を考えれば、馬鹿正直に申請することはできない。
ゆえに、それまでに僕たちは身支度を整え、学校の敷地を後にする。

彼女の家は、ここから県営バスで一五分ほど行ったところにある。少し遅くなった
が、この時間なら終バスがなくなることはない。

ここで車両が来るまでの待ち時間が、僕たちの一日の最後となる。

「うう……寂しいよ……こーちゃん……こーちゃん……!!」
バス停で車を待っているのは僕ら二人だけ。

それで、人目を気にすることなく、ベンチに座って堂々と抱き合っていた。女のコを膝の上に乗せて。

しかも、裸足は唯一の世間体までも脱ぎ捨ててしまっていた。

本当は肌と肌で触れ合いたい——と彼女はいつも求めているが、僕は着衣に時間が掛かるし——何より、いざという時、僕が身を挺しなくてはならない。

周囲への警戒は怠らず気を張っているというのに……女のコに締め上げられた男の性器は嘘をつけない——！

「射精よ……裸足！」

「ん……っ！」

ピュル、つと何かが通っていった感覚はあるが、流石にもう射精ないだろう。それでも裸足は僕にしがみついたままだ。

「そろそろ……バスかな」

「……だね」

そう呟いて鷹池は上からワンピースをかぶるが、僕との繋がりは解こうとしない。下半身を唾え込んだまま、僕の心音を確かめるように寄り添っている。

「こーちゃん、進級おめでと」

「……ありがとう」

今更ながらの祝辞には、彼女なりに重い意味が込められていた。

「この調子でもう一年経ったら……来ちゃうの？ あのコ」

「ああ、うん。きつと……来るよ」

学部的な相性は悪いが、それでも彼女はきつとやってくるだろう。

それを聞いて、鷹池は奮然と立ち上がる。そこに、これまでのような甘えはない。眼鏡こそ鞆の中だが、外で見せていた陰しさを取り戻している。

「だとしても、関係ないから」

座ったままの僕を見下ろす彼女の視線は、チラチラとズボンの方へと引っ張られているようだ。とはいえ、これまでずっと啞えて来たからか、飛びつくほどでもないらしい。役目を終えたそれを中へと仕舞いこむと、彼女の両目はようやく呪縛から開放された。

「例え恋人が入学してこようが、同棲しようが、私を妊娠^{はら}ませてくれるって約束には変わりないからね。しっかり膣^な内に射精^だしてもらおうからそのつもりでいなさい」

近づいてくるヘッドライトは目当てのバスのもものようだ。案内板の脇に停まり、開かれた乗車口に足を掛けたところで、鷹池は少しだけ振り向く。そして、別れの挨拶を呟いた。

「おやすみ、こーちゃん。愛してるよ♥」

ニコリと微笑むその顔は、またしてもあの頃に戻っていた。
だからきつと——

今夜の夢の中でも、僕は彼女に犯されてしまうに違いない。

彼女に僕の子供をプレゼントする——それが、鷹池との間に交わされた約束である。但し、それは互いの家に泊まってはならない——この決め事のため、僕と鷹池はあのような場所での子作りを余儀なくされていた。

というより、他に恋人がいるのにこのようなことをしていて良いわけがない。遠くに住んでいる彼女には本当に申し訳ないと思っている。

しかし……僕には鷹池を拒むことができない。子供の頃に抱いた初恋を、僕は未だに引きずっているようだ。

鷹池のバスが発ったのを見届け、そこから徒歩で一五分ほど歩けば僕の家である。来年から恋人と同棲するつもりで、予め二人用の間取りを選んでおいた。

そのとき、僕は鷹池とどう向き合えば良いのか……今はまだ、分らない。ただ、少なくとも、出産費用のためにバイトを始め、マタニティグッズやら胎教本を買い漁っている彼女を、どうして止めることができようか。

僕が帰宅して部屋の明かりを付けてみると、壁掛け時計は八時半を回っている。今日もすっかり疲れてしまった。これから夕飯と、翌日分の朝食と弁当を用意して、水回りの片付け、洗濯は……明日でいいか。諸々の家事を済ませてちよつとコーデイングをしたら早々に寝てしまおう。明日の朝も、鷹池に腔内射精ななかだししないといけないし。だが、今夜はそこに気になる用事がもう一件。春萌先輩からの預かり物である。内容によつてはこちらからの返事が必要になるかもしれない。早めに確認しておいた方がいいだろう。

ということ、一〇時過ぎ。僕はパソコンを付けることなくベッドの上に腰を掛けた。手元には鞆から取り出した例の封筒。ちよつとした厚さがあるので、それなりの枚数が入っていそうだ。

手をかざしてひっくり返すと、ボスつ、とまとめて紙の束が落ちてくる。これはどうやら漫画らしい。B4サイズの印刷用紙を山折りにして、端をパチパチと留めたお手製の冊子である。これはいわゆる、同人誌、というヤツなのかもしれない。

一ページ目に表紙はなく、いきなり本文が始まっている。

が、その中央に堂々と陣取るのは、コマではなく、メッセージ付きの付箋。

『あの時はゴメン。考えを整理するために、マンガにしてみた。感想は、4人で行つ

たサイドででききたい。来週火曜日の23時、お店の前で待ってる』

あの時……と言われると思い当たる節はいくつかある。この昨年度末に喫茶店で粗相をしてしまった件か、その前に鷹池と食堂でお説教された件か。

ただ、間違いないのは、露出に関するのだらう。先輩は野外プレイを酷く嫌悪している。が、鷹池に言わせると、それは興味の裏返しなのだそうだ。

それを分かっているながら、

いや、分かっていたからこそ、

鷹池は先輩の目の前で全裸になった。

それも、喫茶店の客席で。

他に人がいなかった、とはいえ、そこは公共の場所である。

そんな彼女に対して先輩は、

鷹池の痴態を目の当たりにしながらも——

“女のコが自分から外で裸になるわけがない”

自分の信念と折り合いを付けることができずに、激昂したまま立ち去ってしまった

——それが、昨年冬のことである。

それから一度も連絡は取っていないが……どうやらこのような漫画を描いていたらしい。そして中身は……やはり野外露出モノのようだ。あらゆる性癖を容認する

彼女が、不自然なまでに拒絶していたジャンルである。

しかも、ヒロインの名前は——『春萌』

自分の本名でエロ漫画を描くとは……何とも恥ずかしかったろうな。恐れ入る。

ということは、お相手は彼氏の阿部あべさんか……と思うと少し読む気が削がれてしまう。こういうときに知り合いの男など想像したくないし、何より、あの人とはどうもゲームに対する考え方が合わない。

だが、幸いなことに男は『ご主人様』と呼ばれている。そして、顔もまったく違ってやたらと美形だ。この面構えなら実物とは少しも結びつかないので本当に助かる。

以前、先輩は僕と鷹池をモチーフにしたエロゲー制作を提唱していたが……この画風なら問題なかったかもしれない。

なお、服装についても阿部さんとは全然違う。あの人が着ていたのは典型的な理系男子大学生の装いだっただけ。それを客観的に見せつけられて——さすがの僕も、あれからは身嗜みにも気を使っている。

改めて漫画のキャラクタを見直してみると、この男の着こなしは、僕が目指しているところに近い。春萌さんに採用してもらえたのなら、きっと自分の美的センスもそこまで悪くもないのだろう。

一方、女のコの方は『ご主人様』などと口にしながらも、別にメイド服でもない。

普通の私服である。少々フリルが強調されているのは——単なる作者の趣味だろう。あの人、無類のフリル好きだから。

さて、肝心の本編は……一コマ目から急展開である。

『春萌、お前、スカートの中を見せてみる』

『ご主人様……どうして……？』

そりゃ、言われた方も驚くだらうな。

だが、彼がそんな無茶を言い出した理由はいよいよ酷い。

『あのダサい下着は穿き替えておけと言ったはずだ』

女のコのそういうところにケチをつけるなんて、どういう神経してるんだか。

しかし、彼女はどこまでも従順である。

『はい、そちらは脱ぎました。ですが——』

前のところをギョツと握る春萌。それだけで、中身を想像させられてしまう。

『でも、あの下着はもう穿いてません！ 本当なんです!!』

そう力説するということは……穿いていたものは脱いだものの、他に穿くものがあった……ってことなんだよな……？

そんな読者の期待に、“ご主人様”はしっかりと応えてくれる。

『なら、確かめてやる!』

『きゃっ?!』

フワフワしたスカートの裾をグイーッと豪快に引き上げる変態男。

そしてそれに対して軽い悲鳴一つ以外無抵抗なノーパン女。

うん……実にエロ漫画だ。

大ゴマを使ってドンと描かれているのは、割れ目を露わにさせられた女のコの下半身である。

これには、ちよつと……うん、僕も露出^だしていいかな……？

『春萌……お前ってヘンタイだったんだな』

『ちがっ、そんなんじゃない?!』

足の間を広く取り、男の指に恥部を委ねながら、変態であることは否定している。

グニグニと撫でられ、くばあと開かれた女性器に、修正は掛けられていない。公にしない前提だからだろう。漫画ならでは都合からか陰毛の描写もなく、ツルツルした外側から中身までしっかりと描かれているのがよく判る。修正前を見られただけでも、何だかとても得した気分だ。

『もしかして、ブラも着けてないんじゃないだろうか？』

『いっ、いえ……ブラは……!』

波々としたスモック状の胸元に、男は問答無用に手をかける。そして、寄ったシワ

をギュッと伸ばすと、その下からは女のコの乳首がしっかりと浮き出してきた。

『ノーブラノーパンかよ。このヘンタイめ！』

『ちがうんです……ちがうんです……！』

顔を真っ赤に染めて涙目になってるのに……どうして嫌な気分がしないんだろう。もしかしたら、顔の表現がとても可愛らしいからかもしれない。男に乳首を摘まれ、秘所を掻き回されているのに……口の端には悦びが浮かんでいる。

欲しいのに、恥ずかしい。

常時積極的に女のコから迫られている僕には少し新鮮なシチュエーションだ。

そして、乱暴に接する男というのも。

『ヘンタイは黙ってろ！』

言って、男は彼女の口にスカートの裾を押し込む。

これにも、ヒロインは抗わない。

黙って自らの下半身を曝け出している。

そんな女性の敏感なところにこの男は容赦がない。

黒塗りされていない割れ目に根本までしっかりと挿れ込まれてしまった長い指。

断面図によって描かれている腔内^なで蠢^かく度に、春萌は嬉しそうに身を悶えさせる。

『んっ、んんっ、んんっ！』

小刻みに震えていた腰が、ガクリと落ちた。もしかしたら絶頂イキそうなのかな、と。ペー
ージを捲ると――

プシャアアアアアアア……。

ここも大ゴマである。煽り気味の視点で、こちらに向けておしっこを噴きかけてき
た。

『ごっ、ごめんなさい……我慢できなくて……』

つい口にした謝罪の言葉で、彼女口からスカートがフワリと下りる。それには目も
くれず、男はびしょ濡れになった右手をぼんやりと眺めていた。

『おい、いきなり何してくれんだ』

『ごめんなさい……何でもしますから……』

ついに本番か!? と僕を握る手にも力が入るが……

『舐めろ』

どんなハイスピードで露だ出したか分からないが、彼女の前にボロンと男が投げ出さ
れた。勿論、こちらも無修正である。これのモデルも阿部さんなのだろうか……。う
ーむ、萎えるな、コレは……。考えないようにしておこう。

だが、それを見たヒロインの表情で、僕は少しだけ元気を取り戻せた。突如見せつ
けられた男性器に、彼女は嫌な顔ひとつしていない。ちよっと驚いただけで、愛おし

そうに男の前に跪く。

『はい♥』

チュパチュパペロペロと、本当に嬉しそうだ。彼女の笑顔の前ではモデルが誰かなんて、もはや気にならない。

そして、春萌のテクニクが凄まじいのか、ご主人様はあつという間に堪えきれなくなつた。

『射精すぞ！』

ビュルルつ、ビュルル！

彼女の顔にドロつとした白いものがベチヨベチヨと降り注いでいく。彼女が、現実には掛からなかった。

左手で素早く避難させたし、鷹池によって概ね搾り取られていたお陰で。

しかし……：……シーツは急いで拭う必要があるだろう。

さて、僕の興奮も賢者の境地に至ってしまったが……：……漫画は残すところ一ページである。ラストくらいは見届けたい。

『あったかいザーメン、ありがとうございました』

息を切らせながら、春萌はうっとりとして礼を述べている。無邪気に見せてくれる心からの笑顔に、射精めいた直後だというのにまた膨らんできてしまう。

『今日はこのまま帰るんだぞ』

『はい♥』

顔を白濁まみれにしたまま、彼女らは夜道を歩いていく。その後ろ姿を読者に向けてながら、彼女はこっそりお尻を見せてくれるのだった。

……何とも不思議な物語である。礼菜が書く官能小説はとことん描写が細かく、心情などもしっかり表現されていた。

それに対して漫画は……有無を言わさぬ説得力がある。

どうやっているのか、

いつの間にそうなっていたのか——

このあたりの過程はすっ飛ばされて描かれていない。

やっているからできている、

そうなっているのだからそうなのだ。

読者の想像力に頼らない分、特異な状況でもわかりやすい。どちらにも、各々得意分野があるのだろう。

さて、冷静に考えてみると……僕、あの先輩の描いた漫画で射精めしてしまったな……

∴。これの感想を聞かせて欲しい、といわれても何と伝えれば良いのやら。女の口に向かつて『貴方の本で射精めきました』なんて言えるわけがない。

それも、二三時とは随分な深夜である。おそらく、他の予定と鉢合はわないうよう配慮した結果なのだろうけれど。とはいえこの時間ならば、仮に放課後、鷹池と付き合っていたとしても遅れる心配はない。

それまでに僕は∴∴∴当たり障りない感想文を用意しておく必要があるだろうな。セクハラにならない範囲で、楽しませてもらったことを伝えるために。

忍者 と裸の

何だか色々りましたが、
ついに恋人である埋竹礼菜のご入学！
ところが……

輝山はすっかり二人によって喰われており、
それを知ったきの子の決断は……！
とうとうメンバー勢揃いで
全身全霊全裸露出で大騒ぎ！？

仲間達
(仮)

2017年6月
みんなで仲良く
素っ裸！

露出少女と痴女の
モラルなき戦い!

裸族忍者シリーズ

いつでもどこでも脱ぎたがる
露出少女・埋竹礼菜
大好きな男と子供を成すことに
人生を懸けて迫ってくる痴女・鷹池。
そんな三人に翻弄され続ける
流され男子の痴情まみれの官能ライトノベル!



詳しくはWebで

<http://soekiba.net/ninja/>



sorega kanojo no

それが彼女の

未知なる世界で どう生き延びる...?

生存戦略!

seizon senryaku

エッチな
番外編的短編集
『それが彼女の
性交戦略!』も
こっそり公開中!?

学校が異世界に飛ばされた!?
それでも見知らぬ大地の上で
誰もが遅く生き延びてゆく。
ある者は『力』で、
ある者は『智』で、
ある者は『心』で、
ある者は『愛』で。
そして……
彼女たちは元の日常に
帰ることができるのだろうか……!?

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/4girls/>

オンナ
たぎる♀に

おびえる♂
オトコ

乳を出そうが、尻を出そうが、
女の身体は贅肉扱い。
一方、成人向けコーナーには
半裸の男優ポルノがズラリ——
女が迫り、男があしらう、
そんな世界があったとしたら……？
価値観・身体づくり・社会システムに至るまで
真面目に考えてみた物語です。

リビド〜
男女の性衝動が反転した社会とは
リバ〜サル

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/rev/>

ア ス ト ラ ル ツ イ ン ズ

兄は指揮官に 妹は銃殺刑に

新政府軍の警備兵である兄と
旧政府軍の首謀者である妹。
ふたりの自己都合が交錯する
陰謀豊かなお手軽コメディ!?

テロリスト
迫り来る**反逆者**
プリンセス
担がれる**民間人**
そして...
アホの子
掻き乱す問題児!

妹**vs**王女様
お兄ちゃん争奪戦
勃発!?

から
アストラ!?

妹はお風呂嫌いで
王女は珈琲竹が好き

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

アストラルツインズ
後日談の**R-18**短編集!

詳しくはWebで
<http://soekiba.net/astra/>

僕と私の 露出日記

The diary of Sleeping under the stars for Ours

自然の中で育ち、
裸で野山を駆け回るのが
好きな少年。
非日常を求めて裸になり、
その快感に
目覚めてしまった少女。
孤独に背徳的性欲を
膨らませてゆく二人だったが、
ついに――

立派に
育った
露出癖

わたしとあなたの
露出交換日記

スピンオフでも
野外で全裸！

野外で裸に
なりたい男と
他人の痴態を
覗きたい女。

出逢ってはならない三人が
出逢ってしまい――

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/outdoor/>

正義の投与の行く末は
いじめられっ子の処方箋

添牙いろは

イジメ撲滅運動——

とある高校で突如始まったこの騒動に
埋竹雛菊は意図せず巻き込まれていく。

しかし……

そもそも、イジメとは何なのか？

そんな疑問に突き当たる。

悩み抜いた末に、辿り着いた結論とは……？

そして、運動を取り仕切る

学級委員・あまゆみ雨弓来禾の真の目的とは……？

イジメと向き合うすべての人に送る一冊です。

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/presc/>



“外で裸になりたがる女のコなんていない——”

そう言い切る織寺春萌には

人には言えないトラウマがあった。

しかし、間近で快楽に興じる輝山たちに当てられて

恥的好奇心には抗えず——!?

ところかまわず子作りを迫る妊活痴女・鷹池裸足と

生粋の露出狂・埋竹礼菜も平常運転!